

柏倉家と時代背景

山形大学人文社会科学部・岩田浩太郎

こんにちは。山形大学の岩田です。

「旧柏倉家住宅」が建設された時代背景について考えたいと思います。

お手元の年表を広げてください。九左衛門家の歴史が概観できるように作りました。赤色で歴代当主の没年を示し、経営資産関係には下線を引きました。ご活用ください。

概説するならば、経営の基本は江戸時代から昭和戦前期まで一貫して地主と金融でした。商業は自らは好景気の時のみおこない、近代に有価証券が発行されると積極的に投資するなど、激動する時代環境に機敏に対応する経営を常に実施しました。明治維新後には村山郡で第3位の大地主となり、昭和農業恐慌により一般に地主が動揺した時期にも有価証券からの利益に支えられて九左衛門家は経営を安定的に展開させることができました。「政治と商業は御法度」という家訓があり、政治的な役職にはあまり就きませんでした。その経済力により困った人々の救済やインフラ整備、行政や民間団体の支援に尽力し、多方面で地域貢献を果たしました。一族と共に浄土真宗の門徒であり、その篤い信仰は、社会貢献活動を進める一つのバックボーンにもなったとらえています。

現在の「旧柏倉家住宅」の姿が形成されてくるプロセスにはいくつかの画期があります。2018年の建造物調査の報告書で永井康雄先生がいろいろと指摘をされていますが、そのなかでも18世紀の後半期と明治中後期が重要だと考えます。

まず、18世紀の後半期です。建物関係は緑色の太字で示しました。1枚目の真ん中あたりの、明和4年(1767)をご覧ください。「**仏間(蔵)の建設を始める(明和7年(1770)に落慶供養か)**。」とあります。現在の仏間は明治42年(1909)に大改修されたものですが、その前の建物のことです。つぎに、天明3年(1783)をご覧ください。「**この頃、主屋を建設する。**」とあります。現在の主屋は明治30年(1897)に南側を中心に大改修されたものですが、その前の建物のことです。さらに、天明4年(1784)をご覧ください。「**北蔵の建設を始める。**」とあります。現在の北蔵は明治6年(1873)に建て替えられたものですが、その前の建物のことです。

このように、九左衛門家屋敷の主要な構成要素である主屋・仏間・北蔵などが、明和から天明という時期に建築されたことがわかります。主屋を建て替えるとともに、他の建物も建設し、現在の建物群の構成に近づいたといえます。とりわけ、一棟丸ごと蔵である仏間を建てたことは、全国の他の豪農屋敷とは異なる特色を作り出しました。

それでは何故仏間がこの時期に建てられたのでしょうか。仏間を建てている最中の、明和6年(1769)のところに注目すべき記事があります。「御本山(浄土真宗大谷派・京東本願寺)参詣などのため岡村の門徒のうち15名で十七日講掟を定める。」とあります。十七日講とは信仰と相互扶助の組織です。毎月1回講員が集まって信仰を高め合い、田畑を共同耕作し収穫米や代金を積み立て、本山と江戸の浅草法恩寺へ御鉢米を献上しました。講員が本山へ参詣する旅費を出し、困窮した講員がいれば救済し、葬式も協力しあいまし

た。三嶋山に十七日講の石碑があり、講を開いた6代九左衛門宗順を讃える碑文が刻まれています。十七日講の結成と仏間の建設を同じ時期におこなったのは、宗順が信仰の組織と場をそれぞれ整えることで門徒の活動を充実させようとしたと考えられます。

さて、6代宗順の信仰心は、天明3年頃に建設した主屋の間取りにも現れていると考えます。私は2008年に靱堂で発見された古文書を整理するなかで、主屋のあらたな平面図を見つけました。それを重要文化財指定に向けた建物調査の際に永井先生にお見せしたところ、明治30年の大改修よりも前の間取りを表す図ではないか、つまり天明3年頃に建てられた主屋の平面図ではないか、と推定されました。建造物報告書の26頁に載っています。今回私がさらに注目するのは、この平面図の勝手かつての間の西側の隅のところに、仏前に供える飯めしつまり浄土真宗では「御仏供」と呼ぶ飯を毎日炊く「御鉢屋」が書き込まれていることです。この場所は現在の建物にもあり、その場所の壁は煤すすけているので、あああの場所だとわかる方もいらっしゃると思います。それと同じ場所が大改修前の主屋にも既にあったということです。つまり、天明3年頃に建てられた主屋の間取りにおいても、阿弥陀如来様に毎朝お供えする米を炊く場所が設定されており、当時から「御仏供」はおこなわれていたと思われることです。これは主屋の一部の事柄ですが、仏間の建設や十七日講とも関連し、主屋づくりにも信仰が反映されていたといえます。

なお、十七日講は19世紀に入って本山より特別に公認され「本山講」とも名乗ります。九左衛門家は本山より「道場」とも位置づけられます。この経緯から、九左衛門家の屋敷は真宗門徒の屋敷であり地域の信仰拠点という性質も強めていったと考えます。

つぎに、明治中後期です。2枚目の上の方の、明治30年(1897)をご覧ください。「**主屋の大改修をする。**羽前長崎銀行を柏倉家一類を中心に設立する。」とあります。主屋の大改修が銀行の設立と同時期だったことが注目されます。九左衛門家は銀行設立の数年前から株式公債の購入を開始し、銀行設立後はさらに購入を激増させていきます。その後、大正時代の後半には土地からの小作料などの収入と、有価証券からの配当利子収入が肩を並べるほどになります。昭和農業恐慌の時期には配当利子収入が土地収入を上回るようにさえなります。九左衛門家は地主から資本家へと変化しつつありました。

この経営の変化は、建物にも影響してきます。例えば、株式公債の購入を開始した頃である明治27年(1894)には、主屋の中間ナカマという部屋の奥に押入れを新設して金庫を設置しました。金庫の位置は明治30年の大改修後にも継承されて現在に至っています。金庫は激増する有価証券類などを保管しました。16代当主の桂子さんへの聞き取りによれば、中間ナカマは14代当主ご夫妻が寝泊まりする居場所であり、金庫のほか家の大切な記録を入れた筆筒などが置かれていました。中間ナカマの南側壁面の長押なげしの杭には大福帳が吊されていました。中間ナカマは、いわば九左衛門家の経営管理中枢だったと私は考えています。そのために、中間ナカマと他の部屋を区切る障子や板戸には全部鍵がかかるようになっていました。こうした建物の利用の仕方にも当時の経営の動きが反映されたと考えます。

さて、ここで問題提起をしたいと思います。全国各地の豪農商の邸宅では、明治中期以降西洋風の建築もおこなうことがみられます。来客や取引の応接場所として西洋建築が好まれる時代でもありました。九左衛門家でも当主が銀行の取締役となり株式投資に経営の軸を転換しようとした時期でした。いわば地域の近代化の先頭を走っていたと言えます。それでも、何故九左衛門家では西洋風の建築を取り入れなかったのか、という疑問です。

この点については、まず年表の明治20年（1887）のところをご覧ください。「**主屋の建替え計画を進める。**」とあります。主屋の改修計画は既に12代当主が存命ぞんめいの時期に開始されたのです。大改修に必要な木材などの調達も明治21年から始められています。つまり、改修計画を練った時期と実際に工事をおこなった時期とでは10年ほどのタイムラグがあり、計画を練った時期には経営の転換はまだ起きていなかったからという説明が一つにはできそうです。また、麓先生が注目されたように、大改修後の上座敷の意匠には煎茶趣味せんちやや文人趣味ぶんじんが反映されていることから、当主の教養文化の考察も欠かせないと思います。さらには、さきほど指摘しましたが、真宗門徒の屋敷であることもポイントになると私は考えます。主屋の下座敷の畳のへりは本山と同じものを使用しています。主屋の大改修の後の明治35年（1902）に前蔵の新築をし、本山から来られた方などが泊まれる蔵座敷としています。明治42年（1909）に真宗寺院本堂の様式を取り入れた仏間の大改修も進め、明治45年（1912）からは本山の高僧などのもてなしもてなしに使用する上湯殿の建築も始めます。前蔵も仏間も上湯殿も三田村先生が注目される漆芸しつげい（うるし）を凝らした和風建築です。これら明治中後期に実施された主屋、前蔵、仏間、上湯殿の大改修や建築は一連のものであるととらえるならば、それらのどこにも西洋風の接客空間を設けなかったのは、浄土真宗の建物文化たてもものや様式を尊重する門徒としての姿勢があったからと考えてみたいということです。この点は、かつて佐藤巧たくみ先生が、主屋の上手かみてに仏間と前蔵を配置したあり方は寺院建築における本堂と客殿を併置した形ともみられると指摘されたこととも符合してくると思います。

茅葺きの大きな民家であり真宗門徒の屋敷であるというイメージと、銀行資本家の家というイメージとはなかなか統一できませんが、日本近代の歴史そのものが伝統と近代化が複雑に交錯するものであったことをふまえるならば、九左衛門家もそれを体現した存在であったと位置づけることができるかもしれません。

いずれにしても、国指定重要文化財となった「旧柏倉家住宅」における、上層農民の近代和風建築としての特徴と背景に関しては、建築史の知見に、経営史や宗教史・美術史・文化史の知見をプラスして、総合的に考察していく興味深い問題が尽きないと考えます。

以上です。ご静聴ありがとうございました。